

Report on the Villages in Eastern China (1) : the Jiangsu Province and Shanghai Villages in March 2008

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17343

華東農村訪問調査報告(1)

——2008年3月、江蘇省・上海市の農村——

一 才 納 弁

はじめに

2008年3月上旬、今後本格的な実施を計画している中国農村聞き取り調査のための予備的な調査として江蘇省・上海市の華東農村を訪問する機会を得た。訪問地点は江蘇省南部(蘇南)の南京市・無錫市・太倉市の農村と上海市の嘉定区の農村であり、さらに、上海市の嘉定区政府と松江区政府も訪問した。今回の農村訪問は、それまでの華北の山西省農村調査の結果を踏まえ、また、それに刺激を受けて行われたものである¹⁾。

今回訪問した地域は、中国の中で歴史的にも最も経済が発展していた先進地域であり、近年、ともに脱農化(工業化)・都市化(市街地化)が急速に進行している。ただし、歴史的事情や経済的事情及びその変化などにはかなりの差異が見られる。

まず、南京市江寧区(旧江寧県)は、中華民国時期に南京国民政府によって実験県に指定され、多くの調査が実施されたところである²⁾。また、江寧県には、農村の教育を中心に社会・経済・文化・政治など様々な面での改革に尽力し、『農民教育』(第1巻第1期～第4巻第10期、1931年1月～1934年12月)³⁾を編纂した江蘇省立湯山農民教育館の所在地の南湯村(南湯鎮)もあった。ただし、今回、南京では聞き取り調査は全くできなかった。

他方、無錫市・太倉市・上海市嘉定区の農村は、かつて満鉄によって農村実態調査が実施されたところである。満鉄によって農村調査が行われたのは、江蘇省の常熟・無錫・太倉・南通の各県と上海市の嘉定区・松江区(当時は松

江県)であり、それぞれ1939~41年に報告書が刊行されている⁴⁾。

上海を中心とする華東農村に関する調査では、石田浩氏によるものが強い刺激となり、参考にもなった⁵⁾。また、華東地域の農村に関する調査及びそれに基づく研究成果については、佐藤仁史・太田出の両氏が整理しており⁶⁾、そもそも、両氏は調査と文献に基づく太湖流域社会史に関する研究成果をまとめている⁷⁾。

よって、本稿は、今回訪問した華東農村に関する備忘録的な意味を持つ報告書であり、今後の農村調査に資する材料となれば幸いであると考えている。

なお、今回の農村訪問調査は、残念ながら極めて小規模で個人的なものにならざるをえなかった。なお、今回の農村訪問のうち、江蘇省の南京・無錫・太倉については、劉晴暄(金沢大学大学院人間社会環境研究科客員研究員)に多くの点で助けてもらった。

1 江蘇省南京市近郊農村

(1) 2008年3月3日(月)午後

訪問場所：南京市江寧区江寧經濟技術開發区紅廟村(南京市南部)

南京市街地から旧城壁の南端にある中華門を通過してさらに南方に向かってバスを乗り継ぎ、最後は徒歩にてようやく紅廟村があるはずの場所にまで到着した。だが、地図上にある紅廟村も經濟技術開發区の一部となっていてビルやマンションが林立し、農家は一軒もなく、農地も全く見当たらなくなっていた(写真1を参照)⁸⁾。村のはずれの川沿いは公園として整備されていた大通りを自動車がかひつきりなしに走っていたが、徒歩の通行人はほとんどなく、話を聞くことは全くできなかった。

写真1 かつて紅廟村があった地域



(2) 2008年3月4日(火)午後

訪問場所：南京市江寧区湯山街道作廠村(南京市西部)

南京駅の近くのバス乗り場から湯山行き(南湯線)のバスに乗り、湯山の中心地を通過して終点の「湯山汽運六隊」まで行った(写真2・写真3を参照)。

写真2 「南湯線候车室」



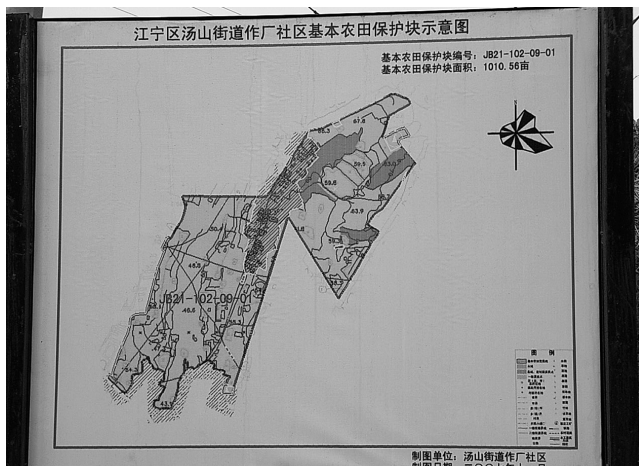
写真3 「南湯線時刻表」

車・次	南京火车站 发车时间	汤山汽运六队 发车时间
1	5: 00	6: 20
2	5: 40	7: 05
3	6: 20	7: 45
4	7: 00	8: 25
5	7: 40	9: 05
6	8: 20	9: 45
7	9: 10	10: 35
8	10: 00	11: 25
9	10: 50	12: 15
10	11: 40	13: 05
11	12: 30	13: 55
12	13: 20	14: 45
13	14: 10	15: 30
14	14: 50	16: 10
15	15: 30	16: 50
16	16: 10	17: 30
17	16: 50	18: 10
18	17: 30	18: 50

バス停から少し歩いた大通り沿いに畑があり、そこで農作業をしている人に話を聞いてみると、栽培している野菜は自家消費用であり、販売はしないという。基本的には、自家消費用の野菜を栽培しているにすぎなくなっている。

その大通り沿いに作廠村の農耕地として保護すべき地域を図示した看板が立てられている(写真4を参照)。

写真4 「江寧区湯山街道作廠社区基本農田保護塊示意图」(2007年11月作製)



さらに、その大通り沿いを歩いて行くと、作廠村社区居民委員会があり、挨拶をしようと建物の中に入っていたが、午後5時前だったにもかかわらず、すでに誰もいなかった(写真5・写真6を参照)。写真5の「作廠村社区居民委員会」の右手前に旧来の作廠村民委員会と思われる建物が建っていた(写真7を参照)。

写真5 作廠村社区居民委員会



写真6 作廠村社区居民委員会



写真7 「作廠村委会」



2 江蘇省無錫市近郊農村

2008年3月6日(木)午前

訪問場所：無錫市浜湖区栄巷街道

前日にまず知人の湯可可氏(57歳、現在は無錫市政府政協委員会研究室主任)を訪ね、かつて満鉄によって農村調査が行われた無錫の農村を訪問したい旨を伝えた。湯氏を介して栄巷街道(写真8～写真10を参照)文化站站長の榮依群氏(かつて農民の家は分散していたが、後に住宅が集合するようになったのであり、子供の頃は現在の住宅集中地は農地で、冬には麦踏みなどの農作業を手伝ったという)と同文化站会計の毛桂英氏を紹介され、上記の3人が同行して隣接する3つの農村(小丁巷・鄭巷・楊木橋)を参観した。なお、栄巷街道は以前の開源郷栄巷鎮である⁹⁾。

1980年代にほとんどの家が新築され、楊木橋村の大部分は開拓されてマンションが建ち並び(写真11を参照)、旧来の一軒家はほとんど残っていない。旧村民たちは、これらのマンションに居住しているという。

写真8 栄巷街道



写真9 栄巷街道弁事所



写真13 横山機械廠



写真10 栄巷街道弁事所



写真14 無錫市公益中学校



写真11 楊木橋村のマンション



写真12 村の工場



村内にあった郷鎮企業はほとんどが郊外に移って工場は操業を停止しているが、現在、小丁巷にあった1ヵ所の郷鎮企業の工場は街道が経営・管理する工場として利用されている(写真12・写真13を参照)。また、小丁巷では、我々が写真を撮っていると、その一帯に居住している老人たちが集まってきて、その中に近くの公益中学校(写真14を参照。企業家として著名な栄徳生がかつて校長を兼ねていた中学校・高校)で生物の教師を務めていたことがあるという老婆(丁麗珍, 73歳, 1936年生まれ)がおり、少し話を聞くことができた。14歳で勉強を始めたが、よく勉強ができたので、教師になったという。

近くに戦争被害の賠償を求めて訴訟のために日本に行ったことがある老人がいると言って、その家まで案内してくれたが、当人は不在だった。解放前は、多くの若い者が栄家の企業・工場を含む上海の工場に働きに行き、年取って退職してから村に帰ってきたという。あたり一帯は、古い家屋が残っており、多くの老人が住み、若い人は都市部に住んでいるという。

鄭巷には、外来者が建てて住んでいる家も多いという。安徽省から移住してきた家族の立派な邸宅もあり、邸宅の前には安徽省(「皖」)のナンバープレートをつけたトラックが駐車していた(写真15を参照)。また、その周辺にはわずかながらも畑も残っており、青菜(チンゲン菜)などの野菜を栽培している(写真16を参照)。

無錫でも、老農民から直接話しを聞くことはほとんどできなかったが、古い家にはまだ多くの老人が居住しており、再訪した際にはいろいろと話をき

写真15 安徽省から移住してきた家族の邸宅



写真16 鄭巷に残る畑



くことができそうである。また、地元の事情に通じた榮巷街道弁事所の榮依群氏に解説付きで案内していただいたことは、村の概略を知る上で非常に有益であった。

なお、顧倬・朱雲泉・王亮豊・陸渭民『江蘇無錫県農村經濟調査第1集 第4区』(江蘇省農民銀行總行, 1931年)は、無錫県第4区(開源郷)で実地調査を行っており、その中にはもちろん榮巷鎮も含まれていることから、今後の調査・研究において参照すべきものである。

また、今回の農村訪問で協力していただいた湯氏から、呉文勉・武力『馬鞍村的百年滄桑—中国村庄經濟与社会變遷研究』(中国經濟出版社, 2006年)を紹介され、何度か調査が行われてきた無錫の馬鞍村を再調査する必要があり、協力するように依頼された。同書によれば、1929年に馬鞍村邵巷調査(第一次無錫保定調査)が行われ、1998年には第4次「無錫保定農村調査」が行われているという。

3 江蘇省太倉市農村

(1) 2008年3月7日(金)午後

訪問場所：太倉市沙溪鎮泰西村

無錫市政府政治協商委員會研究室主任の湯可氏の紹介を通じて太倉市政府政治協商委員會社会事業委主任の周錦榮氏(54歳)を訪問し、周錦榮氏が沙溪鎮政府統計站站長の李建良氏(52歳)を介して泰西村共産黨委員會書記の施雪濤氏(55歳)を紹介してくれた。

蘇州(蘇州南站)から太倉まで長距離高速バスで高速道路を利用して約1時間(片道20元)を要した。さらに、太倉市政府政協委員會から泰西村村民委員會まで周錦榮氏の自動車で約50分を要した(直線距離は短い³が、途中、道路が工事中だったために迂回した)。

聞き取り場所：泰西村共産黨委員會・泰西村村民委員會

聞き手：弁納才一

通訳：劉晴暄

聞き取り対象者：施雪濤

- ・ 太倉県利泰郷遙涇は、現在、太倉市洞涇郷泰西村となっており(利泰郷は解放後に洞涇郷となった)、遙涇河の北側に東西に分布し、姚(遙)西村と姚東村に別れている。
- ・ 姚東村の最も東に位置する施家の豪邸に居住している。
- ・ 1985～87年頃、満鉄農村調査を実施した人の孫と名乗る日本人が泰西村にやってきて、奚衛明(学習秘書、現在は副書記)に聞き取り調査を実施したという。
- ・ 2006年8～9月頃、約10日間、浙江師範大学(浙江省金華市)教授の王景新が農林部の委託を受けて7～8人の大学院生を連れて満鉄の農村実態調査報告書を持って村にやってきて(泊まりがけで)調査を実施したという。その調査結果を本として刊行したと聞いたが、その本は村に寄贈されていないという。そして、そのグループは、上海市嘉定区でも農村調査を実施したと聞いているという。ただし、2008年3月12日現在も、そのような出版物の存在を確認することができていない。
- ・ 先祖は外地から移住してきた。

書記が村民委員会から自宅までの移動中に、村の主要な道路と橋は、日中戦争中に日本人が計画して作ったもので、これが経済発展の基礎となっていると何度も繰り返し直接耳打ちしていた。また、途中、豪華な邸宅を見つけて立ち寄った。敷地内にすでに農業をやらなくなったために使わなくなった脱穀機(写真17を参照)があり、玄関前で老婆が宗教儀式として焼くための紙(銀紙)を銀元(馬蹄銀)の形に似せて作っていた(写真18・写真19を参照)。

写真17 脱穀機



写真18 焼紙を作る老婆



写真19 老婆が作った焼紙



(2) 2008年3月7日(金)午後 太倉市沙溪鎮泰西村

写真20 施金生氏(自宅前にて)

聞き取り場所：施雪濤氏宅(写真20を参照)

聞き手：弁納才一

通訳：劉晴暄

聞き取り対象者：施金生(80歳, 妻の朱二大は78歳)
＝施雪濤氏の父, 村のかつての書
記



個人史

- ・1929年生まれ。
- ・家が貧しかったので、学校には行かなかった。今でも字を書くことができない。
- ・この村の人間は、主食として専らジャポニカ種米を食べ、インディカ種米を食べることはなかったし、麺類もあまり食べなかった。
- ・14歳(1943年)で崑山へ行って「長工」をやり、15歳(1944年)から大工仕事を学び、大工をやって(現在でも大工仕事ができる。織布機も作った。)1949年の解放を迎えた。
- ・日中戦争中、米を扱う「小販子」が崑山から米を売りに来た。というのは、崑山は地勢が低いので棉作には適さない稲作適作地であり、一方、棉作に適していた利泰郷では、棉花が米より高価だったので、棉作が盛んで、米が不足していたからである。棉花を「小販子」に売り、その「小販子」は利泰紗廠(紡績工場)に売った。個人あるいはグループで現金を持って崑山へ米を買い付けに行く者もいた。
- ・1949年以前、作付け作物は小麦・棉花・稲(ジャポニカ種米、一部はもち米)・油菜・蔬菜(青菜・大根・白菜など)で、米と蔬菜以外はほとんどを販売した。
- ・かつて姚(遙)西村で病人が出て治療するために必要な200元を姚東村が出してあげたことがあった。両村の連帯感・一体感が強いことを示している。
- ・1950年に村の農会の代表に任命され、1952年に共青团に加入し、太倉県首届各階層代表大会に代表として出席し、また、県共青团代表大会にも代表として出席した。

- ・ 1953年、普遍民兵制度が実行され、洞涇郷民兵副中隊長に任じられた。
- ・ 1953年、洞涇郷長が互助組の組織を命じ、2つの互助組(姚東村35戸と姚西村28戸)に泰西村の全戸63戸が参加した。姚東村35戸の互助組組長となる。互助組に参加した農家は仲が良く、全く問題は生じなかった。
- ・ 1954年7月1日に予備党員となって1955年7月1日に正式の党員になり、洞涇郷人民代表大会に代表として出席し、姚東村農村初級合作社の社長に任じられた。
- ・ 1955年に成立した4つの初級農業生産合作社(姚東村、姚西村、郁東村、郁西村)は「自願」なので参加しない農家も10戸ほどあったが、その農家は「思想不好」あるいは「小混混」(党の考えを理解できず、まじめに仕事をしない者)だった。
- ・ 1956年、4つの初級農業生産合作社を統合して高級合作社が成立し、社長兼党支部副書記を務め、1958年に人民公社が成立(4つの生産小隊があった)すると、大隊長兼党支部副書記を務め、1965年に泰西村党支部書記に任じられた。
- ・ 1970年代まで女性が紡糸・織布に従事していたといい、1980年代に織った土布と土布で作った上着(写真21を参照)を見せ、土布を土産としてくれた。
- ・ 1972年、直塘農船廠に転勤となり、工場長兼建設隊隊長に任じられ、1975年に直塘建設公司党支部書記兼直塘建築管理站站長に任じられた。
- ・ 1990年、退職。

写真21 施金生氏の妻が土布で作った上着



4 上海市農村

(1) 2008年3月10日(月)午前

訪問場所：嘉定区政府

上海駅の近くの共和路に始発のバス停がある滬唐線(上海～嘉定区唐行鎮)で南翔まで行き(約1時間, 4元), 「嘉定客運中心」(嘉定市街地南部)行きのバスに乗り換えて嘉定のバスターミナル(写真22・写真23を参照)まで行った(約20分, 1.5元)。バスで走行している途中, 土埃がひどかった。

写真22「嘉定長途客運站」



写真23「上海嘉定汽車客運站」



写真24 嘉定区政府庁舎



嘉定のバスターミナルの中で嘉定の地図を購入し(5元), 嘉定区政府を目指して歩く。嘉定区政府のビルは, 非常に立派で, 守衛が政治協商委員会まで道案内してくれた途中での話では, 当該区政府のビルは10年前に3億元(45億円)をかけて建設されたものだという(写真24を参照)。政治協商委員会の責任者(文史資料室の主任か)からは, 嘉定文史資料は「内部発行」となっているので, 部外者とりわけ外国人には販売することができないと言われ, 1冊も購入することができなかつた。嘉定文史資料には社会経済に関する内容はないという。申し訳ないとして, 上海市嘉定区政協文史資料編輯委員会編『人文嘉定』(上海文化出版社, 2006年)を謹呈された。なお, その責任者(50歳代か。名刺をもらうこともできなかつた)は, 嘉定に長く住んでおり, 嘉定の歴史・地理にも詳しいが, 澄塘橋・丁家村は聞いたことがなく, 知らないという。

嘉定客運中心から新嘉線(上海火車站行き。高速道路利用。終点は上海駅近くの恒豊路)に乗って帰ってきた(約50分, 9元)。

(2) 2008年3月11日(火)午後

訪問場所：松江区政府

上海駅から地下鉄3号線に乗って宜山駅で地下鉄9号線へ乗り換え、松江新城駅(写真25を参照)まで行く(1時間30分余り, 7元)。ただし, まだ地下鉄9号線は完成しておらず, 宜山路から次の桂林路まではバスによる輸送となっていた。

写真25 地下鉄9号線松江新城駅



写真26 松江区政府庁舎



松江区政府の守衛のところまで、政治協商委員会が発行する文史資料を見に来たと伝えたが、電話によるやりとりの結果、松江文史資料などはないということで、政治協商委員会にも入れてもらえなかった。前日の嘉定区政府における対応よりも一層ひどく、事実上、門前払いの扱いを受けた。よって、かつて満鉄による調査が行われた農村については全く聞くことができなかった。

嘉定区政府と同様に、松江区政府も紹介者がいないと接触や情報提供が非常に困難であることを思い知らされた。

写真27 松江市街地



写真28 松江駅



(3) 2008年3月12日(水)午前

訪問場所：嘉定区馬陸鎮石崗村

前日の夕方たまたま上海の書店で購入した車裕斌『浙江山区村落经济社会变迁研究』(中国社会科学出版社, 2007年10月)の中に王景新「総論 村域经济社会转型研究的理論, 方法与实践」¹⁰⁾があり, 14頁の総表-1に太倉市沙溪鎮泰西村が満鉄調査時に遙涇村と称し, また, 嘉定区馬陸鎮石崗門村が満鉄調査時に澄塘橋村・丁家村と称していたと記載しているのを参考にして, 当該村の訪問・参観を決意した。ただし, 実際には石崗門村は石崗村だった。

写真29 滬唐線「上海火車站」バス停



写真30 馬陸鎮中心部



滬唐線(写真29を参照)のバスに乗ってビルの建つ馬陸鎮(写真30を参照。上海から馬陸までは1時間15分, 5元)で北嘉線に乗り換えて石崗(馬陸から2つ目のバス停)で下車し, 石崗村村民委員会を訪問し(写真31・写真32を参照), 澄塘橋・丁家村の位置を尋ねると, 親切に教えてくれて自由に参観してよいという許可を得た。書記は不在だった。また, 2006年に浙江師範大学の教授が調査に来たはずだと確認してみたが, 知らないという。村の幹線道路の沿線には工場が林立して農地は全く見られなかった。

写真31 石崗村村民委員会



写真32 石崗村村民委員会



写真33 龔文進氏の自宅(馬陸鎮石崗村241)



写真34 「石岡路」



写真35 龔文進氏



澄塘橋は、住居表示が全て石崗村となっており(写真33を参照)、村の住戸は石岡路に沿うように建っている(写真34を参照)。自宅前で竹籠を編んでいた76歳の老人(龔文進。1933年生まれ。写真35を参照)に少し話を聞くことができた。それによると、澄塘橋は龔介・澄東・澄西の3つの地域からなり、数十年前に澄塘橋から石崗に変わったという。5歳の時(1938年)、日本が中国に侵略したと何度も繰り返して話していたが、日本軍を見たことはないという。筆者がバスに乗ってたった1人でやって来たことを告げると少し驚いた様子だった。漢字は書けるが、共通語が話せない。この家の隣に住む若者(23歳。数年前に蘇北から来て住み込みで仕事をしているという)が通訳をかってくれたが、彼にも聞き取れない部分が多かった。上海語を理解できる者の協力が必要である。

石崗村の一角は住居が取り壊されており、この村にも開発の波が急速に押し寄せているように見えた(写真36を参照)。

澄塘橋と丁家村の間にも全く農地はなく、多くの工場が林立していた。昼休みになると、多くの工場労働者が食事のために道路を歩いていた(写真37を参照)。

写真36 石崗村の一角



写真37 昼食をとるために移動中の工場労働者



写真38 2つの住居表示板(馬陸鎮石
崗村鄧橋935と馬陸鎮鄧橋村935)



写真40 大通りから見た鄧橋村



写真39 焼紙を作る老婆



丁家村は、住居表示が馬陸鎮石崗村鄧橋(馬陸鎮鄧橋村)となっていた(写真38を参照)。たまたま立ち寄った写真10の家には老人たちによれば、この村は丁家村として認識されており、また、この村の老人によれば、ずいぶん前に丁家村という名前から今の名前が変わったという。家の中で数人の老人(最高齢者は73歳)が話をしながら、そのうちの1人の老婆が宗教儀式として焼くための紙を銀元の形に似せて作っていた(写真39を参照。太倉の農村で

見たものと全く同じものだった)。これは、売るためではなく、自分たちで使うという。何度も日本人か、本当に1人できたのかなどと聞かれた。また、戦時中に日本人が調査に来たという話しは聞いたことがないという。この村にも農地は全くない(写真40を参照)。

帰りは滬唐線の希望城(希望路の近くだからか)というバス停から上海駅まで行くことが判明した(1時間20分, 5元)。

(4) 2008年3月27日(木)午後

訪問場所：嘉定区馬陸鎮石崗村(旧澄塘橋)

聞き取り対象者：龔文進(1933年生まれ)

聞き手：弁納才一

聞き取り場所：龔文進氏自宅

前回訪問した際に通訳をしてくれた若者はいなかったが、今回はたまたま孫娘がいて通訳をしてくれた。2回目だったので、少し信頼関係が深まったように感じた。竹籠作りの作業中だったので、作業をしながら、話しを聞かせてもらうことにした。

個人史

9歳(1942年) 小学校に入学。父親が病気で死去。

10歳の時、弟(8歳)が小学校に入学し、6年間通った。

12歳(1945年) 小学校3年生の時、お金がなかったので、小学校に行かなくなった。この時がこれまでの人生の中で最も困難な時期だった。

農作業に従事(10畝の農地)。米(「大米」=ジャポニカ種米)・棉花・青菜を栽培し、米と青菜は自家消費して販売せず、棉花は全て売って綿布を買って商店に衣服を作ってもらった。インディカ種米は食べたことがない。

16歳(1949年) 土地改革では「富農」とされたために、互助組・初級合作社には参加することが許されなかった。

25歳(1958年) 人民公社が成立すると、参加させられた。

1957年に初級合作社が成立したが、高級合作社はなかった。
1960～61年 食糧が不足したが、村では餓死者は出なかった(「以菜代糧」=食糧は少なかったが野菜は多かった)。村外からの流入者はいなかった。

1979年(改革開放政策)以降、村への流入者が急増した。

1990年代初頭、農地が「廠房」(工場用地)となって、なくなってしまった。
若い人は、村の周辺の工場・企業に勤務するか、上海や嘉定の都市部に働きに行く。

60歳(1993年) 日系企業の「野尻光学」(眼鏡工場)(～1994年)と上海協和木製品有限公司(1994～2002年・69歳)(写真41を参照)で守衛として働いた。

2008年3月現在、竹籠作りに従事している(1個17円で販売)。村外から買い付けに来る。ちょうどその時、聞き取り中に2人の買い付け人がやって来た。そして、できあがった竹籠を品定めしている(写真42を参照)。

写真41 「協和木製品有限公司」正門



写真42 竹籠を買い付けに来た2人



竹籠の買い付け人との交渉が始まったので、聞き取りを止めて帰ることにした。すると、ちょうど孫娘の母親が仕事から帰ってきたので、あいさつをし、次回は2008年9月に訪問したい旨を伝えると、歓迎の意を表してくれた。

おわりに

今回の農村訪問調査はあくまで予備的なものであり、何らかの結論的なものを得るには至っていない。

上海市の松江区政府と嘉定区政府においては、事実上の門前払いを食らわされた。上海市にある上海師範大学と華東師範大学の知り合いの研究者との雑談の中で、上海市政府は農村調査に対しては、中国人であれ、外国人であれ、調査を申請してもなかなか許可を出さないと聞いた。

ただし、華東地域の農村が激変し、村名なども変更されつつある中であって、無錫と嘉定ではかつて満鉄が調査を行った農村の場所を確認することができたのは幸いなことだった。

注

- 1) 科学研究費補助金(基盤研究(B)(一般)「中国内陸地域における農村変革の歴史的研究」2005年度～2007年度, 研究代表者:三谷孝)に研究分担者として参加し, 2006年と2007年に山西省臨汾市近郊の高河店村において農民への聞き取り調査を行った。
- 2) 馬俊亜「民国時期江寧の鄉村治理」(徐秀麗主編『中国農村治理の歴史と現状:以定県, 鄒平和江寧為例』社会科学文献出版社, 2004年)は, 中華民国期の鄉村自治について論じている。
- 3) 任応培「湯山社会概況」(『農民教育』第1巻第1期, 1931年1月15日)。なお, 参観した作廠村に関しては, 金亮弼「本館指導下の作廠村信用合作社」(『農民教育』第1巻第6期, 1931年6月20日)があり, 「湯山付近廟会調査」(『農民教育』第1巻第2期, 1931年2月15日)と孫枋「湯山合作事業近況」(『農民教育』第4巻第2期, 1934年2月)においても言及されている。
- 4) 満鉄上海事務所調査室編『上海特別視嘉定区農村実態調査報告書』上海満鉄調査資料第33編(1939年), 満鉄上海事務所調査室編『江蘇省常熟県農村実態調査報告書』上海満鉄調査資料第34編(1939年), 満鉄上海事務所調査室編『江蘇省太倉県農村実態調査報告書』上海満鉄調査資料第35編(1940年), 満鉄上海事務所調査室編『江蘇省松江県農村実態調査報告書』上海満鉄調査資料第48編(1940年), 満鉄上海事務所調査室編『江蘇省無錫県農村実態調査報告書』上海満鉄調査資料第50編(1941年), 満鉄上海事務所調査室編『江蘇省南通県農村実態調査報告書』上海満鉄調査資料第51編(1941年)。
- 5) 石田浩『中国農村の歴史と経済—農村変革の記録』(関西大学出版部, 1991年)・同

『中国農村経済の基礎構造－上海近郊農村の工業化と近代化のあゆみ』(晃洋書房, 1993年)・同『中国伝統農村の変革と工業化－上海近郊農村調査報告』(晃洋書房, 1996年)。

- 6) 佐藤仁史・太田出「太湖流域社会史現地調査報告－外国史研究者とフィールドワーク」(『近代中国研究叢報』第30号, 2008年3月)。
- 7) 太田出・佐藤仁史編著『太湖流域社会の歴史学的研究－地方文献と現地調査からのアプローチ』(汲古書院, 2007年)。
- 8) 筆者は, 1989年9月～1990年7月の約1年間, 南京大学に留学した際に, 何度か自転車で中華門を通過して南京市街地の南方の農村を散策したことがあったが, 当時は中華門より南は全くの農村だった。
- 9) 奥村哲「日中戦争前後の華中農村調査をめぐって－江蘇省無錫県の場合」(東京都立大学人文学部『人文学報』第238号, 1993年3月)。
- 10) 全く同じ文章が陳修穎・朱華友・于濤方著『浙江省市場型村落的社会經濟變遷研究』(中国社会科学出版社, 2007年10月)にも掲載されている。著者の王景新は浙江師範大学農村研究中心主任・工商管理學院副院長も兼務している。

